

小さい猛者連

附屬幼稚園 菊池フジノ

小さい組も一年経つて大きい組になり、そろ／＼我が世の春を唄ひ始める五月頃からであつた。

園のあちこちから「池の組の男の方が……」「池の組の男の方が……」云ふ聲を耳にした。毎日の様にこの苦情がきこえる様になつて來た。子供が歸つたあとで職員室に戻つての先生方のお茶飲み話の中にも、「私の方が池の組に負かされて……」等云ふお言葉も一再ならず伺ふ様になつた。

併し大きい組が三組ある中、他の二組の御子さんは揃ひも揃つて落ちついた、いゝ體格のお子さんばかりなのに、之は又さうした廻り合せか、私の組の男の子は揃ひも揃つて小粒で、然も少數、そして何れも氣の小さい人ばかり。十二人の中、二人程は殆んゞグループに入らず、三人は入る時もあり入らぬ時もあり云ふ工合、残り七人は、常に小さき

一人のリーダーを中心に一隊をなして、他に向つても働きかけ、又自分達でも團結固く遊んでゐるのである。こんな工合なので、實は、負かされて……伺つても、負けて、下さるんだらう位に考へて、そんなに暴威を逞うしてゐるなんてことは、思ひも寄らぬ事であつたのである。

ミころが忘れも出來ぬあの光榮の日、若葉薫る六月の十六日、李王妃殿下を幼稚園にお迎へ申し上げた日の事であつた。御台覽が室順になされて、私の組は最後であつた。その時、私の組は、半分程の人は粘土を、半分程の人は水族館の仕事をしてゐるミころを御覽に供したのであつた。この時、粘土の作品の中には、さうしたはづみであつたか、大口を開いてもの凄く牙をむき出してゐる鰐が三匹も出來てゐた。

いよく御台臨になつて、親しく御歩みを子供達のそばまで寄せられた。この時倉橋先生が、

「この鰐はあなたがお作りになつたの？」

ミ子供等に向つておたづねになつた。するに元氣溢るゝ聲で、中の一人がお答へ申し上げた。「吾が輩」。

妃殿下はにっこり遊ばされた。お伴の方も私共も一同さつと笑つた。續いて他の一人が「これは吾が輩はては」「これはじゃが輩」までお答へ申し上げる様になつた。私は形勢如何になり行くらんミ、はらくして見てゐたのであつた。

倉橋先生は、

「この人達は、幼稚園中の猛者でございます。これでも今日は、餘程、御遠慮を申上げて居るのでございませう」

ミ妃殿下に申し上げて居られた。これを伺つた時からであつた。私の組の兒は、そんなに猛者なのだらうか？ 幼稚園中の猛者なのかしら？ ミほんミに思ふ様になつて來た。それからである、私の目が絶え間なく、この暴威を振ふ吾が一團の子等に向けられて

來たのは。

突進

お辨當の片附けもまだ濟まない或る日の午後であつた。例の一聯隊の連中が盛んに各々の椅子を廊下へ持ち出して行く、出て見るミ、みんな椅子を倒まにして横列に廊下一ぱいに並べてる。みんなはそのかげに蹲つて、遙か向ふにねらひをつけてゐる。相手はミ見れば、お部屋を二つ隔てた山の組の男の兒。之も同様椅子を倒まに横に並べて、こちらをねらつてゐる。

やがて小さきリーダーが、吾が方の伏兵に向つて突喊の號令をかけた、ミ忽ち小粒の連中、椅子を倒まのまゝ廊下を走らせて山の組に向つた。丸で鐵砲丸みたいに向ふ見ずに進んで行く。段々敵に近づくミ、暫くは列を亂さないでゐた敵も一人入り二人入り、遂々みんなお部屋の中へ引込んでドアを閉めてしまつた。廊下に面した窓の硝子戸も閉めてしまつた。中でぎんなにしているかは、スリ硝子の窓故、知る由もなかつた。しばらくして、敵の大將通雄君

は、お窓へ乗つて、一番上の透硝子の所から廊下の形勢を覗いてゐた。

こゝまで見届けて私は、吾が軍に聲をかけた。「もうお部屋へ歸りませう。お椅子をそんな事（倒まにして廊下をすり歩く）するを毀れますよ。毀れるともうその方はお辨當の時立つていたゞかなくちやならないわ」云ふと、食べる事に忠實な小勇士たちは、すぐさま起こして両手でお部屋まで持つて歸つた。

しばらくするに入口にヤアヤアと聲がして五つ六つの顔が覗く。さつきの山の組の連中である。吾がリーダーが、「ソレ！」と聲をかけるに小粒の連中、取るものも取りあへず彼等の後を追ひつめる。敵は一目散に逃げこんでお部屋のドアを閉める、追手は山の組の閉されたドアの外に、ガヤガヤしてたかつてゐる。又行つて引き連れてお部屋へもぐる。やがて又入口にドヤ／＼と聲がする。「ソレ！」とリーダーは聲をかける。追ひつめる。向ふは逃げてドアを閉める。こんな事が又繰り返されやうとするので、兩軍に向つて、戦争中止の談判をしやうと廊下へ出たら、山の組の先

生も出てゐらした。先生も私も兩軍に向つて、「もう之で止ませうよ、からかつたり、追つかけたりするのはおしまひにませう」云つて兩軍を各々のお部屋に引連れては入つた。お歸りの時間も直ぐだつたので、この日は之で事なく済んだのであつた。

野 球

社會的な或る行事が、子供等遊びの中に可成り澤山入り入れられるものであり、従つて幼稚園の自由遊びの時にも屢々之が見受けられる。例へば九月の中旬にはお神輿、十月の半ばには野球、一月半ばにはお相撲云つた様に。

丁度十月半ば頃だつた。中天に上つた日本晴れの陽ざしを一ばいに浴びながら、海の組の男の子供達は全員總出云つた形で、吾が池の組に面したあたりの庭を占領して、野球に打ち興じて居た。

例の吾が一聯隊の男の兒は、いつもの根城ねじろの遊戯室前のテレスで大積木に餘念がなかつた。併し、海の組の子供達の野球が熱して來て歡聲があがる毎に、大積木の連中は手

を休めてはこちらに見入るのであつた。段々自分達の遊びが白けわたつて来た。その中、例の大將は二人の仲間ミ、野球の方へやつて来た。他の人達も思はず知らず、これにつづいた。そして、バッターやキャッチャーのあたりへ来て、球の来るのを邪魔し出した。みんながみんな、一二度づゝ手を出してはいたづらをする。温良な分別ある達夫ちやん等は、ほんミにお義理でするミ云ふ様な、誠に氣の乗らない仕方であつた様子は、見てゐるものにもよく讀めたのである。先方の口説き役の稻川昭ちやん等は、自分の持場を捨てゝこゝまで出て来て、このやんちや達にいろ／＼口説いて居たが、なか／＼に急には止めなかつた。海の組の先生は黙つて、この様子を向ふから見てゐらした。私は海の子供達に心で詫びながら窓のかげにかくれて、子供達には見えない所でこの有様を見てゐた。

こちらの連中、兵隊ごっこはよくするが(リーダーが軍人の方の御子さんのせいであらう)野球の事は、あまり良く知らないせいもあつたらう。又海の組の先生が向ふで黙つて見てゐらしたせいもあつたらうか、いたづらにも興が

乗らずに一隊は自分達のお砂場の上に上げてしまつた。そして、二班に分れてお砂場の端ミ端ミを占領して塹壕を掘り、又自分達の戦争ごっこが始まつたのである。

私は手ぐすねひいて、好機到来さばかりに悦んだ、ミ云ふのは、この頃、このリーダーの横暴が目立つてひきくなつて来たからである。お話だミ云つても、お仕事だミ云つて呼んでも、このリーダーが「行くなよ」ミ一聲かければ、否、聲の無いうちから何か指令があるものミ、みんなが一應はリーダーの顔を見るのである。「行くなよ」ミ聲のあらうものなら、みんなにしたつて仕事になんかは入つては來ないのである。折角仕事には入つてゐてもリーダーが外へ出れば、もうそのグループの連中は浮腰で、お仕事なんぞはほんのお義理ミ云つた様に、さつさミ片附けて出てしまふのである。面白い思付きだからこれを一ぱいに充實指導をして、相當なものに仕上げ様ミ意氣込んでも、リーダーの様子一つで誠にあつさりミ「もういゝよ、之で止すよ」ミ片附けてしまふ有様。で始めはさうかして、このリーダーを落ちつかせて仕事に長く引き入れて置かうミ努力して見たが

このリーダー君、面白い創意は充分あるのであるが、長續きはあんまりしない方で、仕事には至つて恬淡さしたもので。こんな工合なので、今度はさうかしてこのリーダーの力を殺ぎ度いものゝ願つて居た折も折だつたからである。

私はこんな事を思つても見た。即ちリーダーの力を殺ぐには、萬人が悪いと認める事をし出かした時に、それをみんなで論議してそれは悪い事だゝ納得させたら、幾分かは、リーダーの權威を減する事が出来るか。

で今日の事件は正しく自分達が始めに手を下したのである。そしてリーダーが最初に自ら手を出して邪魔したのである。自分はこの事件の始めから終りまでを、確かに見届けたのである。この強味に力を得たので、今日は一つ、この事件をみんなで評議して見やうと思つた。之をこの記憶の生々しい中、今日のお辨當の前にしようと思つた。でいつもより少々早めにお辨當のお仕度に取りかゝつた。やがてお仕度も出来たのでみんなをお部屋に誘つた。仕事の時には全努力をしてもなかゝは入つて来ない人達なのに、お辨當の時だけは待ち兼ねた云ふ様子では入つて来

る。可愛いゝ限りだ。私はお辨當の用意をして、リーダーの一人おいた隣りの椅子に座を占めて、みんなのお仕度の出来るのを待つた。

みんなもいそゝと急いで、やがて、静かになつた。いづもならこゝで「いたゞきませう」と言つて、お辨當を開くのであるが、今日はそうはいかない。私は徐ろに口を切つた。

「あのね、さつきこゝのお窓から見てるたら、男の方達、

みんな、海の組の方が面白さうに野球をしてゐらしたところを邪魔をしましたね。あんな事するのいゝ事でせうか、成信ちゃんが一番先きにしましたね、そしたらみんながそのまねをしていたづらをしたのね、あんな事いゝ事？」

「悪い事」「悪い事」を方々から聲がした。

私「浩ちゃん、悪い事つてよく分つてるのに、さうして真似をしたの？」

返事がない、

私「清ちゃんはどうしたの？」

清「だつて、成信君の通りにしないよ、池の組の男の人は、

みんなあつちに(自分の敵にの意)なるんだもの」

今度は成信君に向つて、

「ね、悪い事をして見せて、その真似をしないからつて

いじめたりする様な大將は、日本の大將じゃないと思ひ

ますよ。君がよく話すあの馬賊の大將ならね、やれあそ

この家から鶏を取つて来いの、牛を盗んで来いのつて、

悪い事を言付けてさせますけれどね、日本の大將はみん

ないゝ事ばかり教へて下さるんだと思ひますよ、君、

お父様に伺つてご覧なさい」

この間中、子供達の間にも權威がある等々は思

ひも寄らない温順さで、うなづいて聞いて呉れる。こゝで

止め様かきも思つたが、扱てこないだは、みんなに命じて

康夫さんを打たせてゐたし、又その前には善治さんを使い

めさせてゐた事もあつたと思ひ出して、又思ひ返して攻勢

に出た。

私「ね、こないだは、康夫ちゃんをみんなに言付けてぶた

せてゐたでせう。それから善治ちゃんをいじめた事もあ

りましたね、

さうでせう。そんな悪い事をみんなにさせなくなつたら

又大將になる様に、しばらく新兵になつてゐませう。そ

の間でなにかに大將になつていたゞきませうね？」

「云へば、又さつきのすなほさで承諾する。」

「ウン、僕新兵になつてゐるよ。悪い事しなくなつたら又大

將にしてね」

「云ふ。後日又大將にする事を約して、扱て今度は、み

んなに向つて云ふ。」

「じゃ、その間、あなたが大將になつたらいゝでせうか？」

女の人達はみんな「清ちゃん」「清ちゃん」云ふ。男の人

達は四人程清ちゃんを云ひ、二人程は省さんを、云ひ、

二人は達夫ちゃんを云ふ。その中無邪氣一ぱいのあざけ

ない顔をした善治さんが、「僕が大將がいゝや」云ひ自薦運動

をしたのには、思はず爆笑してしまつた。漸くに取り繕つ

て、今の口投票の結果に結末をつけて、清さんが大將にな

る事になつた。他の人達は「僕は參謀だの」「僕は中隊長」だ

のミロ々に自分の位置を語り合つてゐた。之で一段落がつか

いたのでお辨當にした。

お辨當の空^{から}を職員室に置いてお部屋にもぎつて見たら、これは又さうでせう、いつもは、早く食べ終へて、お遊戯室前のテレスで、さつきのつゞきの遊びをして成信君の濟むのを待つてゐる連中なのに、成信君が外へ出すに、窻際のスチームの所で繪本を見てゐたら、みんなが遊びを止めでは入つて来るではありませんか、そして成信君を中心にみんな頭を集めて繪本に見入つてゐるのです。今が今、成信君の悪を認めて、成信君が大將でなくなつた筈が、事實は、依然として成信大將なのである、

愚かなる保母の長い間の信念、リーダーの力を殺ぐ方法としての第一段の構へは、一瞬にしてものゝ見事に敗北したのであつた。

* * *

消防隊

朝夕は肌寒さを感じられる様になつた十一月の或る朝の事だつた。お部屋のドアを開いて、テレスへ出て庭を見るに、まだ、出揃はないと云ふまばらな子供達の群であつ

た。

海の組の子供達は八九人、みんなハンカチを頭に被つてその上から帽子をぶかり、消防隊ごつこをして、お山を降りたり登つたりして元氣に遊んでゐる。私の組の子は男の子が四五人だけ庭に降り立つた。

例の大將成信君に浩君、達夫君、清君の四人は外套を頭からかぶつて、その上から帽子をかぶつた、とても妙な扮装である。この四人は外へ出るさいつもの根據地へは行かずに、消防隊の、登つたり降りたりする、山への登り口の芝生に腰を下した。こちらから見てゐるに、睨めたり手を出したりするわけではないが、何かしら消防遊びに引かゝつて居る様に察せられる。今に邪魔を始めるかも知れないと思つて見てゐるが、容易に手は出さない、唯時々景氣よく、口でぶうく云ひながら走り廻る消防隊の方を振り返る位のところであるが、あの虚勢をはつてらしい扮装云ひ、様子云ひ何きなしに引かゝつて居る様だ。

私は下穿きに代へて、この四人のそばへ行つた。そして圓木の端に腰を下してこの人達と向ひ合つた。私はにこ

にこし乍ら云つた。

「あなた方何していらつしやるの？こんな所で」

「くたびれたから休んでんの」三成信さん、

「でも来たばかりぢやありませんか、まだ何もしないのにくたびれるなんておかしいわ」三、云つて見た。この人達の心の中のわだかまりが、ほころびるかと思つて云つては見たが、一向に反應がない。四人三もにこくししながら黙つてゐる。

この人達は、心の中のわだかまりを私に向つておしかくす程老猶では勿論ない、三云つて、そのわだかまりを意識してゐる様子でもない。何か心にあつた三しても、これ程淡いものを、私が出て来てわざ／＼それにさわつて明るみへ引出すなんて、非教育的な事だ、止さう、そしてこゝを去つてあちらから後の形勢を見て居やうか三も思つた。併し何だか心の中のものにさわつても見度い氣持だつた、で考へた。それに觸れて見た所で、後の指導よろしきを得れば一度だけでそう有害な結果にもなるまい。こんな理窟をつけて、自分の好奇心の満足を得やう三試みた。私は思ひ切

つて、ほん三に思ひ切つて露骨に云つて見た。

「あなた方、海の組の男の方が、消防ごつこをして遊んでるの氣に入らないの？」

する三達夫君、思ひきりよく、にこくしながら、

「ウン、ちつ三癪だね」三傍らの浩君を振り返る。

浩君も「ウン」三同意した。

「どうして？」三私は尋ねた。する三達夫君

「だつて僕達、あれを昨日の午後してたんだもの」

三云ふ。で私

「そう、昨日あなた方してたのを、他の組の方があゝやつてしてるのが氣に入らなかつたの？」三思はず納得した。が直ぐ又つ／＼けた。

「だつてね、あなた方が昨日あれをしてるたのを見て、面白そうだ三思つて見てゐらしたんでせう。だから今朝、来る三すぐあゝやつて、皆さんでしていらつしやるのよ、何もそんなに癪にさわらなくなつていゝのよ、ね、面白そうだ、いゝ事だ三思つたから真似なすつたんで、怒るわけありませんよ」

ミ云ふミ、四人ミも黙つて芝をむしりながらにや〜笑つてゐた。そうこうしてる中、みんな立つて、ポツポツ歩いていつものテレスの方へ行つた。そこで、大積木を取り出して、遊び始めた。

消防隊の連中は相變らず威勢がよい。

私はテレスに向ふ子供等の後姿を見ながら思つて見た。

あんなにこわがつて、觸れるべからざるものに觸れるミ云ふ、その氣持の中にはむしろ捨鉢的な氣持さへも挾んで敢へて觸れる事をしたのに、觸れて見た結果が却つて、良かったのではないかしら、大げさな言ひ方ではあるが、カタルシスをさせた様なものではなかつたかしら？

あゝして行く後姿の中には、そんな「癩だ」なんて云ふ心持はもう消え去つてしまつたミ云ふ様子があり〜、見取れたからである。

二 月

軒ごとに梅の花咲き乾びたる枯田の里に
けふは雪ふる

いぶせみてみればあたりの低山に白梅の花
咲きしづもれり

ひそまりて久しく見ればとほ山のひなたの
冬木風さわぐらし

庭くまにこほりつきたる堅雪に音たて、降
るけふの雨かな

しみじみとけふ降る雨はきさらぎの春の
はじめの雨にあらずや

(若山牧水)